委員会報告

〈S-S 法〉言語発達遅滞検査を用いた健常幼児の言語能力調査

言語委員会言語発達遅滞小委員会

飯塚 直美¹⁾ 小寺 富子²⁾ 倉井 成子²⁾ 久野 雅樹³⁾
佐竹 恒夫⁴⁾

要 約 : 1 歳 6 ヶ月から 6 歳 11 ヶ月までの就学前健常幼児 336 名を対象に、〈S-S 法〉言語発達遅滞検査を用いて言語能力調査を行った。本稿では、言語理解と表現それぞれについて、絵カードを用いた語彙、語連鎖の検査結果を報告した。

理解面は、1 歳後半で身近な事物の名称や動作語、2 歳前半で 2～3 語連鎖、4 歳前半で語順、5 歳後半で助詞の理解が可能であった。表現面は、1 歳後半で事物の名称、2 歳前半で動作語や 2 語連鎖、3 歳後半で 3 語連鎖の表現が可能であった。これらの結果より、健常幼児の発達において、〈S-S 法〉言語発達遅滞検査の基本的な段階の順序性が確認された。また、言語訓練における幼児語や身ぶりの有用性が示唆された。

索引用語 : 言語発達, 言語発達遅滞, 言語評価, ノーマルデータ, 〈S-S 法〉

Normative Data for Language Comprehension and Production in Pre-school Children as Assessed by
“National Rehabilitation Center 〈S-S Test〉”

Naomi Iizuka¹⁾, Tomiko Kodera²⁾, Shigeko Kurai²⁾,
Masaki Hisano³⁾, Tsuneo Satake⁴⁾

Abstract : We administered the “National Rehabilitation Center 〈S-S Test〉”, used as an index of language assessment and intervention for children with delayed language, to 336 normal preschool children from 1 to 6 years of age.

The results were as follows. (1) Children comprehended names of familiar objects and verbs at 18-24 months, 2- to 3-word chains at 24-30 months, functions of word order at 4 years and functions of the postpositional words “ga” and “wo” at 5-and-a-half. (2) Children uttered names of familiar objects at 18-24 months, verbs and 2-word chains at 24-30 months, and 3-word chains at 3-and-a-half. (3) Developmental sequency of stages of sign-significate relations, assumed by the 〈S-S Test〉, were confirmed in normal development.

¹⁾国際医療福祉大学保健学部言語聴覚障害学科 : 〒 324-0011 大田原市北金丸 2600-1

²⁾国立身体障害者リハビリテーションセンター病院第 2 機能回復訓練部 : 〒 359-0042 所沢市並木 4-1

³⁾電気通信大学人文社会科学系 : 〒 182-0021 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1

⁴⁾横浜市総合リハビリテーションセンター : 〒 222-0035 横浜市港北区鳥山町 1770

¹⁾International University of Health and Welfare : 2600-1, Kitakanemaru, Otawara-shi, Tochigi 324-0011

²⁾Department of Speech and Hearing, Hospital of the National Rehabilitation Center for the Disabled : 4-1, Namiki, Tokorozawa-shi, Saitama 359-0042

³⁾Division of Humanities, Social Science and Foreign Language, University of Electro-Communications : 1-5-1, Chofu-ga-oka, Chofu-shi, Tokyo 182-0021

⁴⁾Yokohama Rehabilitation Center : 1770, Toriyama-cho, Kohoku-ku, Yokohama-shi, Kanagawa 222-0035

原稿受理 : 1997 年 9 月 2 日

(4) Usefulness of baby talk and gesticulative signs in language intervention was suggested.

Key words : language development, delayed speech and language, language assessment, normative data

はじめに

日本音声言語医学会言語発達遅滞小委員会の前身である言語発達遅滞検査法小委員会は、1980年に言語発達遅滞検査法〈試案1〉を発表し^{1,2)}、これを就学前の健常幼児に実施した調査結果を1987年に発表した³⁾。次いで、1989年に検査項目の改訂増補版を〈試案2〉として発表し⁴⁾、1991年に国リハ式〈S-S法〉言語発達遅滞検査⁵⁾（以下、〈S-S法〉言語発達遅滞検査と略記）と改名して現在に至っている。

本検査法は、言語発達遅滞児に対する働きかけの手がかりを得るための criterion referenced test として有用であるが、遅滞の程度や個々の子どもの言語発達の特徴を知るためには健常児のデータが不可欠である。そこで今回、①1989年に改訂された検査法を用いてデータを収集し、正常発達との対照を可能にする、②〈試案1〉を用いた調査で不十分であった表現（発信）面の検討や統計的な分析を行う、などを目的に、〈S-S法〉言語発達遅滞検査の一部の検査項目を就学前児に実施した。本稿では、調査結果のうち、理解面と表現面それぞれについて、絵カードを用いた語彙、語連鎖の結果を報告し、健常幼児における言語発達の特徴を考察する。

方 法

1. 対象

対象は、神奈川県、千葉県および東京都内の保育園または保育所に在籍している幼児で、担任の保育士が同年齢集団の中で知的発達や行動面に問題がないと判断し、言語聴覚士（以下、ST）による検査結果も先行研究³⁾のデータと比較して大きな問題がないと判断された336名である。表1に対象児数の年齢別内訳を示す。年齢範囲は1歳6ヵ月から6歳11ヵ月で、原則として6ヵ月ごとの年齢群に区分し、各群が20名以上になるよう配慮した。ただし、先行研究³⁾から個人差や発達の変化が特に大きいと予測される1歳後半は、1歳6ヵ月から1歳8ヵ月と1歳9ヵ月から1歳11ヵ月の3ヵ月ごとの群に分け、各月齢8名から11名に調査を行った。

2. 材料および手続き

検査材料は、〈S-S法〉言語発達遅滞検査のうち、絵カードを使用する語彙および語連鎖の検査である。表2に材料の一覧を示す。

調査は臨床経験3年以上のST13名が担当し、対象児の在籍する保育園で個別に実施した。各児の反応は、STがその場で所定の用紙に記録した。発語内容や誤反応の場合の誤りの内容は、できるだけ忠実に記述した。検査の所要時間は10分から25分程度であった。調査期間は1992年7月から1994年3月である。

結 果

1. 語彙（単語）検査

語彙の理解検査は、事物の名称・動作語・大小は3歳未満、色名は4歳未満の子どもに実施した。表現検査は、事物の名称・動作語・大小は4歳未満、色名は5歳未満の子どもに実施した。事物の名称と動作語の検査では、成人語^{※1)}で理解や表現ができない場合は幼児語^{※2)}や身ぶりによる理解や表現の可否を確認した。

図1から図4に、事物の名称（全16語）と動作語（全5語）について、成人語での理解および表現が可能な

表1 対象児の内訳

年齢群	年齢区分 (歳：月)	平均月齢 (月)	総数 (人)	男 (人)	女 (人)
1歳後半	1：6～1：8	19.0	29	18	11
	1：9～1：11	22.0	27	15	12
2歳前半	2：0～2：5	26.6	35	19	16
2歳後半	2：6～2：11	32.6	33	13	20
3歳前半	3：0～3：5	38.6	26	12	14
3歳後半	3：6～3：11	44.3	31	14	17
4歳前半	4：0～4：5	50.0	27	15	12
4歳後半	4：6～4：11	56.7	25	15	10
5歳前半	5：0～5：5	62.4	25	13	12
5歳後半	5：6～5：11	67.8	23	15	8
6歳前半	6：0～6：5	74.7	27	11	16
6歳後半	6：6～6：11	80.1	28	14	14
計		46.7	336	174	162

※1)成人語：その社会の成人の間で共通に用いられている語形・音声・意味をもつ語（村田⁶⁾）。表現面の分析では、3音節以上の語における1音節の省略（例、ヒコキ→コキ）や、構音の誤り（例、ポーシ→ポーチ）は許容した。

※2)幼児語：「ワンワン」「マンマ」など慣用的に育児語として用いられている語で、基本的には幼児の構音しやすい音声からなる同音反復の擬音語（村田⁶⁾）。

表2 検査材料

1. 語彙検査

事物の名称 絵カード

16枚 日常事物：くつ、ぼうし、めがね、とけい、はさみ、でんわ
 動物：ぞう、いぬ、ねこ
 食べ物：パン、バナナ、りんご、ごはん
 乗り物：くるま、でんしゃ、ひこうき

動作語 絵カード

5枚 寝る、洗う、食べる、泣く、切る

大小切り抜き絵

2枚 大きい、小さい（りんご）

色カード

4枚 赤、黄、青、緑

2. 語連鎖検査

(1)文（非可逆事態）絵カード

2語連鎖

4枚

{りんご}を{食べる}
 {バナナ}を{洗う/切る}

(対象+動作)

2語連鎖

4枚

{お母さん(ママ)}が{食べる}
 {男の子/女の子}が{洗う/切る}

(動作主+動作)

3語連鎖

8枚

{お母さん(ママ)}が{りんご}を{食べる}
 {男の子/女の子}が{バナナ}を{洗う/切る}

(動作主+対象+動作)

(2)名詞句絵カード

2語連鎖

4枚

{大きい}{靴}
 {小さい}{帽子}

(大小+事物)

2語連鎖

4枚

{赤い}{靴}
 {黄色い/青い}{帽子}

(色名+事物)

3語連鎖

8枚

{大きい}{赤い}{靴}
 {小さい}{黄色い/青い}{帽子}

(大小+色名+事物)

3. 統語方略検査

文（可逆事態）絵カード

6枚

{うさぎ}{が}{パンダ}{を}{うさぎ}{が}洗う
 {いぬ}{が}{パンダ}{を}{いぬ}

(動作主が対象を動作)

(対象を動作主が動作)

図1 事物の名称の理解：成人語での正答数の年齢群別分布 * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$ (隣接する月齢群間に対する t 検定の結果)

図2 事物の名称の表現：成人語での正答数の年齢群別分布 * $p < 0.05$, **** $p < 0.0001$

図3 動作語の理解：成人語での正答数の年齢群別分布 ** $p < 0.01$

図4 動作語の表現：成人語での正答数の年齢群別分布 * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

表3 語彙検査の各成績の通過率が60%と90%になる年齢
(プロビット法による推定値)

	理 解		表 現	
	60 %	90 %	60 %	90 %
事物の名称：幼・有/成・16語中3語	1:6	1:9	1:9	2:0
事物の名称：成人語・16語中3語	1:7	1:10	1:10	2:2
事物の名称：成人語・16語中8語	1:8	2:0	2:1	2:5
動作語：幼/成・5語中3語	1:8	2:0	2:2	2:7
動作語：成人語・5語中3語	1:10	2:2	2:7	3:1
大小	2:1	2:5	2:4	2:9
色名：4色中2色	2:7	3:5	2:9	4:2
色名：4色中3色	2:10	3:10	3:2	4:5

注) 幼・有/成：成人語以外に幼児語による理解，何らかの有意味語による表現を可とする

幼/成：成人語以外に幼児語による理解，表現を可とする

語数の年齢群別の分布を示した。また，各語彙項目の理解と表現について，一定の正答数が何歳くらいで得られるかの目安を与えるために，項目通過年齢の推定を行い，結果を表3に示した（プロビット法）。

1) 事物の名称の理解

事物の名称の理解は，1歳6ヵ月から1歳8ヵ月では幼児語による刺激を含めても課題に応じられない子どもが若干みられたが，1歳9ヵ月以上は全員が可能であった。図1より，1歳後半は成人語による理解語数の個人差が大きく，0語から16語すべての理解が可能な子どもが含まれる。2歳前半ではほとんどの子も

が検査語の大半（13語以上）を成人語で理解できている。また，図1の正答数の分布より，事物の名称の理解に大きな伸びがみられるのは1歳9ヵ月から1歳11ヵ月と2歳前半の群である。プロビット法による推定では，90%の子どもが16語中3語以上成人語の理解が可能であるのは1歳10ヵ月，半数の8語以上は2歳0ヵ月である（表3）。この推定値は言語発達の遅れの可能性を判断する際の目安として有用であると考えられる。

記号形式（成人語・幼児語・身ぶり）と理解の関係：60%の子どもが「犬」を成人語または幼児語（ワンワ

ン)で理解できる年齢(以下、通過年齢はすべてプロビット法による推定値)は1歳7ヵ月、成人語で理解できるのは1歳11ヵ月である。すなわち、成人語の理解の習得は幼児語より4ヵ月遅れており、低年齢では「犬」を成人語で理解できず幼児語で理解している子どもが多い。幼児語と成人語で60%通過年齢に3ヵ月以上の差があるのは「犬」だけであったが、車・ぞう・靴・はさみ・ねこ・パン・電話・ごはん・時計も、成人語は理解できないが幼児語は理解できる子どもが複数いた。また、めがね・時間・はさみ・ぞうは、音声は理解できないが身ぶりは理解できる子どもが若干いた。成人語より幼児語の習得が早い理由としては、低年齢児に対しては周囲の大人が幼児語を使用する傾向があることや、幼児語には有縁的な擬音語が多いことなどが考えられる。

カテゴリカルな誤り：1歳後半から2歳前半の子どもの多くに、刺激語「犬」に対して「ねこ」の絵カードを選択する、「りんご」に対して「バナナ」を選択するなど、同一カテゴリーに属する他の語に誤る反応が認められた。このようなカテゴリカルな誤りは、小寺ら³⁾も指摘しているように、健常児の言語発達研究で言語表現における語の過大拡張(overextension⁷⁾)として知られているが、本検査法は選択肢の中に同一カテゴリーに属する語を複数含めているので、理解についても同じ上位カテゴリーに属する語彙の分化を検討することが可能である。たとえば、ある1歳6ヵ月児は、表現の検査で「ぞう」も「犬」と同じに「ワンワン」と表出したが、理解の検査では「ぞう」と「犬」を成人語で正しく選択できていたことから、意味理解としては両者を明確に区別しており、表現においてのみ過大拡張が生じているととらえることができる。このように、理解と表現を同一語彙で比較できることも本検査法の特長の1つである。

2) 事物の名称の表現

事物の名称は、1歳10ヵ月までは検査絵カードに対して有意味語⁸⁾の表出が全くない子どもがみられた。図2より、1歳6ヵ月から1歳8ヵ月では、事物の名称を成人語でほとんど表現できない子どもが多い。1歳9ヵ月から1歳11ヵ月と2歳前半の群は個人差が大きい。3歳台になると大半の子どもが成人語で13語以上表現できるが、全問正答に至らない子どもが多い。

これは、3歳後半はまだ「ぞう」を「ゾーサン」、「犬」を「ワンワン」などのように動物名を幼児語で表現する子どもが多いことによるものである。正答数の分布より、事物の名称の表現の成績に大きな伸びがみられるのは1歳9ヵ月から1歳11ヵ月、2歳前半、2歳後半の群である。90%の子どもが成人語の表現が16語中3語以上可能となる年齢は2歳2ヵ月、半数の8語以上可能となるのは2歳5ヵ月である。

記号形式(成人語・幼児語・身ぶり)と表現の関係：ぞう・犬・車・ねこは、60%の子どもで成人語の表現が可能となる年齢が、有意味語の表出が可能となる年齢より1年以上遅い。たとえば「車」は1歳9ヵ月に60%の子どもで有意義語の表出が可能となるが、成人語の表現の60%通過年齢は2歳10ヵ月であった。これらの語については、成人語での表現がみられない場合の表現形式のほとんどが幼児語であった。この他に、「パン」を「パンパン」という幼児語で表現する子どもも比較的多くみられた。低年齢の子どもが成人語より幼児語を多く使用する理由としては、幼児語の方が子どもにとって構音しやすい音から成っていて、音節構造⁹⁾も単純であるため表出が容易であることと、理解の場合と同様、周囲の大人が幼児語で子どもに話しかけることが多いことが考えられる。

語の音節構造：言語発達遅滞児の中には、発語数が増えても音や音節の省略が多い、同音反復主体の幼児語の表現が多く、なかなか成人語による表現が増えないなど、音節構造の発達に問題をもつ子どもがいる⁸⁾。音節構造の発達に関する資料はわが国では少なく⁹⁾、今後の研究が必要な領域であると思われるので、参考資料として、今回の調査から得られた結果を一部報告する。

a. 「飛行機/çiko: ki/」を「コーキ/ko: ki/」というなど、3音節語の1音節を省略して表出する子どもは2歳7ヵ月頃までは比較的多いが、それ以降は徐々に少なくなり、3歳10ヵ月の子どもが最後であった。

b. 「りんご/riŋgo/」を「ゴ/ŋo/」というなど、2音節以上の語を単音節のみで表出することがある子どもは1歳6ヵ月から2歳6ヵ月までの96名中13名(13.5%)で、2歳6ヵ月が最年長であった。

c. ごく少数の例外を除き、2歳1ヵ月以上の子どもは、事物名称の検査語の2音節語(「靴/kutsu/」「帽

⁸⁾有意味語：幼児語や語の一部の音のみの表出(word partial, 例：りんご→ゴ)なども含め、その語を表す有意味な音声表出と認められるもの

⁹⁾音節構造：syllable structureあるいは語形 word shape：語を構成する音節の子音(consonant)一母音(vowel)構造(CV構造)。たとえば「犬」[inu]はVCV, 「はさみ」[hasami]はCVCVCVという音節構造をもっている。

子/bo:ji/) のうち 3 語以上について CVCV の音節構造の表出が可能であった。同様に、ごく少数の例外を除き、2 歳 3 ヶ月以上の子どもは、3 音節語(「めがね/mejane/」「はさみ/hasami/」など) のうち 2 語以上について CVCVCV の音節構造の表出が可能であった。

3) 動作語の理解

動作語の理解は事物の名称より難しく、2 歳 0 ヶ月まで課題に応じられない子どもがいたが、2 歳 1 ヶ月以上は全員が可能であった。図 3 より、1 歳後半では個人差が大きく、成人語の理解が全くできない 0 語の子どもから 5 語すべてが可能なお子どもが含まれる。2 歳後半では、ほとんどの子どもが 5 語すべてを成人語で理解できている。また、正答数の分布より、1 歳 9 ヶ月から 1 歳 11 ヶ月、2 歳前半、2 歳後半の群で動作語の理解に大きな伸びがみられる。90 % 以上の子どもで成人語の理解が 5 語中 3 語以上可能となるのは 2 歳 2 ヶ月であった。

記号形式(成人語・幼児語・身ぶり)と理解の関係：幼児語と成人語で 60 % 通過年齢に 3 ヶ月以上の差が認められたのは「寝る」のみで、成人語の通過年齢が 1 歳 10 ヶ月で、幼児語(ネンネ)の 1 歳 7 ヶ月より 3 ヶ月遅い。すべての動作語で、成人語の理解ができなくても幼児語の理解が可能な者、音声理解できなくても身ぶりの理解が可能な者が認められた。

4) 動作語の表現

動作語の表現は事物の名称より難しく、成人語による表現がみられない子どもが 2 歳 10 ヶ月までいた。幼児語でも表現できない子どもは 2 歳 3 ヶ月までいた。図 4 より、2 歳台は 0 から 5 語までと個人差が大きい。3 歳台ではほとんどの子どもが成人語で 3 語以上表現可能であった。正答数の分布より、1 歳 9 ヶ月か

ら 3 歳前半にかけて、動作語の表現の発達に大きな伸びがみられる。90 % の子どもが動作語の音声表現が幼児語も含めて 3 語以上可能となる年齢は 2 歳 7 ヶ月、成人語で 3 語以上可能となるのは 3 歳 1 ヶ月であった。

記号形式(成人語・幼児語・身ぶり)と表現の関係：

1 歳 6 ヶ月から 2 歳 5 ヶ月までの子ども 91 名についてみると、「寝る」は 51.6 %、「切る(チョキチョキなど)」は 23.1 %、「泣く(エーンなど)」は 20.9 % の子どもが成人語でなく幼児語を使用していた。「食べる(パクパクなど)」「洗う(ゴシゴシなど)」は幼児語の使用は少なかった。すべての語で、身ぶり表現のみ可能な者が認められた。また、3 歳 6 ヶ月頃までは、たとえば「ゴシゴシしてる」といいながら手をこするなど、音声と同時に(あるいは前後して)身振りを表出する子どもが認められた。身振りの使用は 2 歳前半の子どもに比較的多く認められた。

5) 大小および色名

表 3 より、大小の理解と表現は 2 歳前半、2 名以上の色名の理解と表現は 2 歳後半に、60 % の子どもが可能である。大小の検査では、音声は理解できないが身ぶりをつけると理解できる子どもが 1 名だけみられた。色名の検査では、「赤」「黄色」といった色名そのものは理解できないが、「リンゴの色」「バナナの色」など関連する物をいうと正しく選択できる子どもが多く認められた。表現では、「ブルー」「グリーン」など英語をいう子どもが複数認められた。

2. 語連鎖検査

1) 語連鎖の理解

表 4 に語連鎖の各項目について、通過率が 60 % および 90 % となる推定年齢を示した。2 語連鎖の理解は 2 歳 1 ヶ月に 60 %、2 歳 7 ヶ月に 90 % の子どもが可能

表 4 語連鎖検査の各成績の通過率が 60 % と 90 % になる月齢
(プロビット法による推定値)

段階*	理 解		表 現	
	60 %	90 %	60 %	90 %
4-1 2 語連鎖 (いずれか 1 形式以上)	2:1	2:4	2:3	2:7
4-2 3 語連鎖 1 形式 (文・名詞句いずれか)	2:4	2:9	3:7	5:3
4-2 3 語連鎖 2 形式 (文・名詞句両方とも)	3:1	3:11	5:1	(7:5)
5-1 統語方略：語順 (可逆事態)	4:2	5:4		
5-2 統語方略：助詞 (可逆事態)	5:11	(8:3)	4:0**	5:5**

* <S-S 法> 言語発達遅滞検査の記号形式—指示内容関係の段階との対応

**検査絵カードに対し、「ウサギがイヌを洗っている」など、助詞を省略せずに正しく使用して表現できた場合を正反応とする

である。3語連鎖の理解は2歳4ヵ月に60%、2歳9ヵ月に90%が可能であった。

統語方略：「統語方略：語順」とは、「犬がうさぎを洗う」といった可逆文を語順を手がかりに理解する状態であり、この検査では、最初の語が動作主、次の語が対象であると判断する段階である。「統語方略：助詞」とは、「犬が(を)うさぎを(が)洗う」といった可逆文を助詞を手がかりに理解する段階であり、ここでは「が」を伴うのが動作主、「を」を伴うのが対象であると判断する段階である。60%の子どもが「語順」による語連鎖の理解が可能な年齢は4歳2ヵ月、「助詞」による理解が可能な年齢は5歳11ヵ月である。通過率が90%となる年齢は、「語順」は5歳4ヵ月(60%通過年齢に14ヵ月遅れる)「助詞」は今回の調査対象の最年長の6歳11ヵ月までには90%に達せず、推定で8歳3ヵ月となっており、60%通過年齢に2年以上遅れる。

2) 語連鎖の表現

表4より、2語連鎖の表現は2歳3ヵ月に60%、2歳7ヵ月に90%の子どもが可能である。すなわち、2歳半にはほとんどの子どもが絵をみて何らかの2語連鎖を発することができ、3語連鎖の表現は3歳7ヵ月に60%、5歳3ヵ月に90%が可能であるが、2語連鎖の表現の習得からは大幅に遅れている。

参考までに、統語方略の検査絵カードに対して「ウサギがイヌを洗ってる」など、助詞「が」と「を」を省略せず正しく使用して表現できる年齢を表4に示した。4歳0ヵ月で60%、5歳5ヵ月で90%の子どもが可能である。

考 察

1. 語彙の発達について

今回の調査結果より、子どもの日常生活でよく使われる事物の名称や動作語の習得は、理解・表現とも1歳後半から2歳前半に急速に進むことが確認された。理解検査の成績は絵の解読能力とも関連すると考えられることから、2歳前半で事物だけでなく動作を表す語や絵の理解が広がるということは、この時期に子どもたちが簡単な絵本を楽しむようになることと関連があるように思われ、興味深い。表現面では、2歳前半でCVCVCVの音節構造の表出が確実に可能であったことから、健常児はかなり早期に基礎的な音節構造

の表出が可能となることが示唆された。また、1歳後半から2歳前半は成績の個人差が大きいことから、特に低年齢児の言語発達の評価に際しては、個人差を考慮した慎重な判断が必要であると考えられる。

健常幼児における基本的な語彙の習得は、理解、表現ともに事物の名称→動作語→大小→色名の順に進むことが確認された。たとえば著者らは、自閉症の子どもの多くが動作語や大小より色名を早く習得することを臨床上経験しているが、今回の調査で得られた健常児の語彙発達に関する資料は、言語発達に障害をもつ子どもたちの言語習得の特徴を検討する上でも有用であると考えられた。

われわれは、言語の理解面に重度の遅れを示す子どもの語彙学習を進める際に、まず幼児語や身ぶりの理解を促す働きかけを行うことが多い。今回の調査結果から、健常児においても事物の名称や動作語で成人語より幼児語の理解が容易であったり、音声より身ぶりの理解が容易な場合があることが示されたことは、言語訓練における幼児語や身ぶりの指導の有効性を支持するものと考えてよいのではないだろうか。また、表現面でも成人語より幼児語や身ぶりの表現が優位な子どもが多く認められたことから、表現面の訓練においても幼児語や身ぶりの訓練を行うことの有用性が示唆された。

2. 語連鎖の発達について

健常幼児では、1歳後半から2歳前半にかけて語彙の理解が急速に拡大するのに続いて、短期間に種々の形式の2～3語連鎖の理解が可能となることが示された。表現面でも、2歳前半に語彙の拡大と並行して2語連鎖の表出が可能となっている。

また、今回の検査では、3語連鎖の表現の獲得が2語連鎖に大幅に遅れていた。日常生活では、3歳前後で多くの子どもが3語連鎖の表出が可能であることから、今回の検査課題は子どもの3語連鎖の表現をうまく引き出せていないと考えられる。この理由としては、刺激絵が3語連鎖の表現を引き出しにくい、練習課題など、課題理解を促す設定が不十分であったことなどがあげられ、今後の検討を要する。

3. 記号形式—指示内容関係の発達段階について

図5および図6に年齢群ごとの理解および表現の段階の分布を示した。段階は、2語連鎖以上は<S-S法>言語発達遅滞検査の記号形式—指示内容関係^{※5)}の<段

※5) 言語における「意味するもの(記号形式)」と「意味されるもの(指示内容)」の関係

※6) <S-S法>言語発達遅滞検査では、段階3以下は実物を用いた検査の成績を含めて判定される。今回の調査は絵カードを用いる検査しか実施していないため、段階3以下については便宜的にこの2段階を設定した。

図5 各年齢群における理解の段階

図6 各年齢群における表現の段階

階4-1：2語連鎖)以上の各段階に対応している。ただし、〈段階4-2：3語連鎖〉は3語連鎖1形式と2形式の2つの下位段階に分けて検討した。段階4-1より下位の段階については、本稿では、理解面については〈事物の名称・成人語16語中2語以下〉と〈事物の

名称・成人語16語中3語以上〉の2段階に分けた^{注6)}。表現面については、〈事物の名称・有意味語16語中2語以下〉〈事物の名称・有意味語16語中3語以上〉〈事物の名称・成人語16語中3語以上〉の3段階に分けた。

図5より、理解面は、年齢の上昇に伴いより上位の

段階の子どもの割合が増加している。表3および表4に示した通過年齢推定値と合わせて、これらの段階の順序性が確認されたといえるだろう。また、2歳後半の群にはすべての段階の子どもがおり、個人差が非常に大きい時期であることがわかり興味深い。ただし、〈3語連鎖2形式〉と〈統語方略：語順〉の60%通過年齢の差が13ヵ月（3歳1ヵ月と4歳2ヵ月）、〈統語方略：語順〉と〈統語方略：助詞〉の60%通過年齢の差が21ヵ月（4歳2ヵ月と5歳11ヵ月）と大きく、幼児期後半の言語発達の段階をより細かく判定できる検査項目の検討が今後の課題であろう。

図6より、表現面でも年齢の上昇に伴いより上位の段階の子どもの割合が増加しており、通過年齢推定値と合わせて、これらの段階の順序性が確認された。しかし、①先にも述べたように、段階間の通過年齢の差が非常に大きいこと、②3歳台以上は成績が頭打ちとなり、年齢群間で成績の分布にほとんど違いがなくなるなど、理解面以上に検査項目の検討が必要と考えられる。

ま と め

1. 今回の調査結果より、健常児は基本的な語彙および語連鎖の理解と表現を2歳半頃までに急速に獲得し、より複雑な統語処理については4歳から6歳台にかけてゆっくり獲得していくことが示された。

2. 健常児において、〈S-S法〉言語発達遅滞検査で仮定している記号形式—指示内容関係の段階の順序性が確認され、各段階と年齢との対応が得られた。

3. 健常児においても成人語に比し幼児語の理解や表現が優位な時期があること、動作語の表現に伴って身ぶりの表出が多いことなどが確認され、言語発達遅滞児の訓練に対する有用な示唆が得られた。

4. 今後、理解・表現とも、3歳以上の言語発達の段階をより細かく検討できる検査項目を開発する必要があることが示唆された。

本稿を終えるにあたり、調査にご協力いただいた神奈川県横浜市・川崎市、千葉県八千代市・佐倉市・千葉市、東京都杉並区の

保育園の園児および先生方、鈴木典明氏（元横浜市総合リハビリテーションセンター通園療育課長）、調査や検査結果の処理にご協力いただいた言語聴覚士の諸兄姉に心より感謝いたします。

文 献

- 1) 小寺富子, 倉井成子, 山田麗子, 他: 言語発達遅滞検査法〈試案1〉. 日本聴能言語士協会会報, 18: 17-25, 1980.
- 2) 小寺富子, 倉井成子, 山田麗子, 他: 言語発達遅滞検査法〈試案1〉. 音声言語医学, 22: 185-193, 1981.
- 3) 小寺富子, 倉井成子, 里村愛子, 他: 言語発達遅滞検査法〈試案1〉を用いた正常幼児の言語能力の調査. 音声言語医学, 28: 183-199, 1987.
- 4) 小寺富子, 倉井成子, 里村愛子, 他: 言語発達遅滞検査法〈試案2〉. 音声言語医学, 30: 263-276, 1989.
- 5) 小寺富子, 倉井成子, 佐竹恒夫, 他: 国リハ式〈S-S法〉言語発達遅滞検査法検査マニュアル改訂版増補. エスコアール, 千葉, 1992.
- 6) 村田孝次: 幼児の言語発達. 培風館, 東京, 1968.
- 7) Clark, E. V.: What's word? On the child's acquisition of semantics in his first language. Cognitive development and the acquisition of language (edited by T. E. Moore), Academic Press, 1973.
- 8) Shriberg, L., Widder, C.: Speech and prosody characteristics of adults with mental retardation. Journal of Speech and Hearing Research, 33: 627-653, 1990.
- 9) 大澤富美子: ダウン症児の構音—音韻プロセス分析による検討一. 音声言語医学, 36: 274-285, 1995.

別刷請求先: 〒324-0011 大田原市北金丸2600-1

国際医療福祉大学言語聴覚障害学科
飯塚直美